

と見つかりませぬ。序に見つかり悪いものを今二三種あげて見ますと、岩と同じ色で楕圓形をしたヒサラガヒといふのがあります。是を岩から引きはがすと直ぐ老爺の背の様に曲ります其れで、チイガセとも申します。其背の方には八枚の骨板が縦に并んで其周圍には肉質の様な突起が澤山にあります。此類でケハダヒサラガヒといふのは八枚の骨板の左右に石灰質から出来た毛の塊りが辨慶の旅の衣の珠數懸の紐の様になつてゐます。又此様な毛も肉質の突起もなく、八個の骨板が肉に埋まつて僅かに其先の方だけが外から見ゆる様になつたものはケナシヒサラガヒであります。

こんなものゝ名稱を一々知るといふ事は困難の様でまた必要もないと思はれぬでもありませんが、名を聞いてまた見直すや草の花

で名も知れぬ花よりは知つた花の方が興味を感じ又折角名を知つて居ても實物と出合はなければ面白は少ないものです。其れ故に名前を知るも宜しいが實物に接するが猶更必要な事せう。然し此事は餘り大袈裟に考へると手がつきませぬから、時に臨み折に觸れて一つでも二つでも理解して母親なり先生なりが先づ自ら段々と自然界に近づきになり、子供達もしらすゝ興味をおこす様になれば結構せう。

三、春の雑草

東京女子高等
師範学校教諭

竹島 茂 郎

「いそがしや莖を摘めばつくつくし」と千代女が咏んだ様に、春の野邊は誠に感興の深いものであります。彼の山邊赤人の「春の野の莖つみにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」と云ふ歌心は、此

の莖の喚び起す強き感興と、此の感興から湧き出す春ののどかな心持とを、極度まで云ひ現はして居ます。私は之から春の野にある雑草の中で、此の評判物のすみれとつくしと、其のつくしの親のすぎなとすみれの乳姉妹と呼ぶるゝたんぼ、れんげさうのことを簡単に述べませう。

一、すみれ（莖）

一口にすみれと申しましても、其の中に色々の種類があります。皆さんは其の中三色すみれとにほいすみれとは御承知でありませう。さて三色すみれの様に地上莖のある種類で、野邊の雑草中に混つて居るものにたちつぼすみれとつぼすみれと呼ぶるゝ種類がありますたちつぼすみれと申しますのは、葉は少し幅廣い心臟形で、葉柄のもとにある一對の托葉は櫛形に分裂して居て、花は帶紫色でありますし、つぼすみれと申します方は、葉は腎臟形で花は白色又は白紫色であります。

又にはほいすみれの様に地上莖のない種類で、葉は長楕圓狀卵形で、葉柄に翼をもつて居まして、帶紫色の花の咲く種類は普通のすみれで、葉の形は普通のすみれと同様で、白い花の咲くのをしろばなすみれと申します。又葉は長い心臟狀卵形で、葉柄に翼をもつて居ない種類は之をこすみれと申します。

今おなぐさみに、右の外のすみれの種類をあげますとざつと次の十六種あります。即ち「さすみれ」「一名きばなのごまのつめ」(おほみやますすみれ)「すみれさいしん」(ながばのすみれさいしん)「えぞすみれ」(えぞたちつぼすみれ)「おほばたちつぼすみれ」(はいつぼすみれ)「みやますすみれ」(ひめみやますすみれ)「ふもとすみれ」(たちすみれ)「いちげすみれ」(いぶきすみれ)「あふひすみれ」(しはいすみれ)の類であります。

二、つくし(土筆)……すぎな(問荊)

「さは姫の筆かとぞ見る土筆雪かきわくる春のけしきは」(藤原爲家)と歌にもある様に、つくしは雪中に春のおとづれをなすものであるが、之はすぎなの地下莖から實(胞子)を結ばんが爲に特別に出るので、つくしの枯れたあとから益々すぎなの芽が出るのであります。子規の發句に「すぎな多き土手に出でたり土筆狩」とありますが、併しすぎなとつくしとは一緒には出ません。土筆の成長は誠に早いもので、雨の一日をおいて行つて見ると、昨日の雨が皆土筆になつたかと思はれる位に、野原一面に生ひ出て居ることもありますので「雨は皆つくしになりぬ山畑」(月芳)など云ふ發句もあります。

つくしの袴と云ふのは葉であります。葉は凡て莖の節の所に着くものであります。澤山輪生して居る所から互に縁の所が癒着して鞞形をして居るのであります。すぎなの節がよくぬけまして、其の節にある鞞の所へぬけた莖をさし込んで、どこを接いだかあてつこをすることがあります。すぎなの莖は綠色をして居て葉の代りを致します。

つくしの穂から飛び立つ煙の様なものは實(胞子)であります。この實は八十倍位の顯微鏡か又は少し上等の蟲眼鏡で見ますと、小さや粒で四本の紐をつけて居まして、其の紐が少し息をかけますと忽ち巻き縮まつて粒をつゝみ、息をかけることをやめると次第に跳ね反つて伸びあがります、その有様は誠に輕快微妙なものであります、一つ實驗して御覽なさい。

三、たんぼ、(蒲公英)

たんぼは地下に養分を含んだ太い根があつて、其の上端に極短い莖がついて居て、此の莖から葉を

地上にのべて、花莖もまた之から出ます。たんぼ、の花は晝夜により、又晴雨によつて開閉します、併し其の花^{ハナビラ}と見ゆるものは實は一つの花でありまして、其のもの^ノ所に毛^{ウシヤウ}状の萼と後に實^ミになるべき小さな子房^{シバウ}とがあります。

花が過ぎたあとが暫くつぼまつて居ますと、今度はよい天氣に白い毛の様なポヤ／＼した花の様ものが開きますが、之は既に實が出来て、各の實の先に之を飛ばさん爲の毛が着いて居るのでありまして此の毛は即ちさきの毛状の萼の變つたものであります、之を冠毛^{クラシモウ}と呼びます、さはれ形まで全く一つの花形に作られて、兄弟姉妹の様の一つ花^{ウツナ}托に成熟した數多くの實は、今や春風に乗つて四方に飛び散らんと冠毛をひろげてまちかまへて居る有様を見ますと何とも云はれぬ心地が致します。

人は此の冠毛によつて飛んで居るたんぼ、の實を種子と呼んで居ますが、之は丁度飛行機が飛んで居るのを人が飛んで居ると云ふのと同じ程度の大きい誤りであります。

四、れんげそう (紫雲英)

れんげさうは一名えぐと呼びます、「小山田のえぐのわかなを打かへし苗代水を引きかくるかな」と堀河院の詠まれましたのは、田にれんげさうを植ゑて之を打ちかへして肥料にする所を詠まれたものでありまして、今日とても田舎に行きますと、此の爲に田に一面にえぐを作つてあるのを見かするであります。

學校の遠足で郊外に出た時に、斯様な田を見付けますと、子供は我先にと駆けつけて其の花を摘んで幾つかの花束をこしらへ、之は母上に之は姉上に又妹にと色々心あてして居るのを見る度に「君がため

をのゝあれたをふみわけてえぐつむ袖やかつとほりけん」と後鳥羽院の咏まれましたことどもを思ひう
かへ、貴ミカきも賤イセしきも今も古きも變らぬは人の心なりけりと思はれるのであります。

あなたの花壇は奇麗ですか。

あなたの植木鉢には今どんな花が

咲いてゐますか。